

巖山河

第20号

平成 19 年 5 月 15 日

発行

社団法人 沼津牧水会

目次

歌と感傷	2
特別企画展	
「若山喜志子展」	4
第 53 回 沼津牧水祭	
短歌大会	10
碑前祭・芝酒盛	11
第 19 回 雛の歌会	12
文化講座	13
サロン音楽の夕べ	14
平成 18 年度事業報告	15
定款・編集後記	16

歌と感傷

福島泰樹



講演中の筆者

ながれ、後ろは山が聳え、西側の硝子戸越しには茫々と荒野が広がっていた。裏山から吹き下ろしてくる木枯は女の悲鳴のように悲しかった。都会育ちの私がおのれの中の孤独と、初めて向き合ったのである。

四方には私以外の誰もいないことを知った時、短歌はまごうかたなく一人の人間への痛切なる「呼びかけ」であるということを実感した。囲炉裏に火を熾し、チロリに酒を滾らせながら、私は来し方を想い、遠方の友を想い、恋しい女のことを想った。想うことは歌に繋がっていった。

歌書くはひとりの愛もひとの死もついに
は瀕死のモディリアニイよ
赤裸々に自己のおもいを告げたあと晩秋
の店あら煮くいおり
悲しみの落ちてくるよなこの庭に死すべ
し死なずさぶがりておる
酒滾るまで沸かしけりくるしけりおれの
半生 反省せぬぞ
青山はおれにあるかや珈琲を挽きつつ此
処に死すると言うを

四方を山と川に囲まれた「寒村」の庵に、女がいようはずはない。しかし、ガラス窓からさしこむ月光は、孤独な私に、あおい眸と白くゆたかな乳房をもった女を呼び寄せてくれたのである。

作家高橋和巳は、私に「君は短歌で哭くことが出来るか」と言った。高橋さん、いまこそ私は短歌で哭くことができます、と応えていた。歌を書くことよって現実的にはなにを得ることはできないかもしれない。だが歌はさめざめと泣くことの、人を愛することの至福と自由を私にもたらせてくれた。

早稲田短歌会に入部し、現代短歌（なかなずく前衛短歌）と出会った私にとって、一首の中に「悲しい」「淋しい」の語を表記する

初めて人前で自作の短歌を朗読したのは、一九七〇年三月、第一歌集『パリケード・一九六六年二月』の出版記念会の席上であった。短歌は「呼びかけ」「語りかけ」の詩型である。ならば実際に自分の声で呼びかけてみようと思ったのである。（ステージ活動を開始してから三十有余年、海外をふくめ全国一、〇〇〇ステージ以上をこなしてきた）

その年の秋、私は東京を去り愛鷹山麓の村、沼津市柳沢の一人となる。庵の前には溪流が

渓谷はかなしかりけりこれからを流れる
よくなひとりとなろう

パン食えば涙こぼれる寒村のセンチメン
タルジャム詩集とぞ

汝の目と乳房を愛す晩秋の月光くまなく
さすガラス窓

葱むけば遥かならぬやその女の開きしむ
ねが匂うごとくに



千本浜海岸から眺めた松原越しの富士

こと自体が嘲笑の対象であった。

入部したばかりの私は、感傷こそ歌である
と、(熱狂して読んだ若山牧水を楯に) 先輩
たちに一歩もひこうとはしなかった。しかし、
状況の波はやがて私に「歴史的社会的存在と
しての私」ということを考えさせるように
なっていた。それは、短歌で、現代文学を書
けるかという問いでもあった。

その私が、赤裸なおのれと向き合ったので
ある。一九七〇年晩秋、首都東京を離れた私
は、まったき歌となっていたのだ。「寒村赤嶺」
三十五首を、囲炉裏に酒を滾らせながら一気
に書き上げていた。滾っていたのはおのれの
あられもない感傷であった。

やがて私は村の人の口利きで、沼津市の海
岸の松林の中にある千本小学校に、産休補助
教員として配属されることとなった。若山牧
水が居を構えた市道はすぐ近くだった。松林
の中には「幾山河こえさりゆかば寂しさのは
てなむ国ぞけふも旅ゆく」の巨大な歌碑があ
り、牧水居士の墓のある千本浜道の乗運寺も
間近であった。

白銀輝く富士を千本松原の向こうに仰ぎな
がら海岸を児童たちと駆けた日の記憶が蘇っ
てくる。孤独と酒と歌、茫漠とした寂寥感、
若山牧水を最も身近に感じた日々であった。

存ぞらえて君を想わば吹雪する暮坂峠われも
越えなむ



歌集『茫漠山日誌』

【筆者プロフィール】ふくしま やすき

昭和十八年東京下谷生れ。早稲田大
学文学部哲学科卒業。歌集『バリケー
ド・一九六六年二月』で歌壇にデビュー。
一九七〇年より「歌謡の復権と肉声の回
復」をスローガンに短歌朗読ステージを
開始。第二十歌集、『茫漠山日誌』で第
四回若山牧水賞を受賞。現在、下谷法昌
寺住職、「月光の会」主宰。昨年の「第
五十三回沼津牧水祭・短歌大会」に講師
を務めていただく。本会会員。

特別企画展

若山喜志子展

平成十八年九月二十日(水)

十月十五日(日)



喜志子(昭和30年信州崖の湯にて)

本会会報『幾山河』第十八号(平成十七年五月十五日発行)の巻頭を飾った小高賢氏の「影とし吾は―若山喜志子の自立と牧水」と題する論考は、牧水を支えた妻喜志子の人となりとその生涯を「女性の自立」という側面から捉えたもので、歌人としての喜志子の再認識にもつながるものであった。

うてはびびくいのちのしらべしらべあひ
て世にありがたき二人なりしを

牧水とのめぐり合わせを得がたいものと思ひ、

形にそふ影とし念じうつそ身を我はや君
にささげ来にしを

と、牧水にそう影のようになって身をささげて来た喜志子に焦点を当てた小高氏の論考は反響を呼び、本会会員をはじめ多くの方々から、喜志子を正面から取り上げた企画展の開催をという声が起こった。

そこで、本会の平成十八年度の特別企画展として、「若山喜志子展」の開催となった。

企画展は、本会が所蔵する資料のほか、榎本篁子当館館長をはじめ、若山家、長野県塩尻市にある喜志子の生家太田家、塩尻短歌館、諏訪湖博物館・赤彦記念館等のご協力を得て、豊富な資料がそろい、充実した企画展を開催することができた。

九月二十日(水)の企画展開会式は、工藤達朗沼津市教育長、榎本館長ご夫妻ほか各方面からのご列席のもと、賑やかに行われた。

和室に見立てたコーナーには、喜志子が着用していた着物や孫篁子への結婚祝いの風炉

先屏風、初孫が生まれる時の喜びを表した「桃の寿五首」の茶掛など喜志子の日常を偲ばせる品々が展示された。着物の丈から喜志子は写真のイメージよりも実際には小柄だったように思われる。榎本館長に伺うと、「背が高く大きく感じていたのは、私が子供だったせいでしょうか」と話された。



開会式のテープカット(左から工藤教育長、榎本館長、林理事長)

展示会場の正面に掲げられた河越虎之進画伯筆になる喜志子の油彩の肖像画が来館者を迎えた。故郷広丘村の風景や喜志子の文学的成長に影響を与えた歌人たちの写真、喜志子



展示を見る人々

自筆の半切、色紙、短冊が壁面を飾り、中央の大テーブルには兄太田稲雄宛や次女真木子宛の絵手紙、また義母若山マキ宛の初めての手紙など興味深い資料が並べられた。また、岩手県北上市から熊本県南阿蘇村まで二十九基ある喜志子歌碑の写真と分布図、乗運寺の若山家墓所に建てられた牧水・喜志子の「比翼の歌碑」の拓本など百点近くもの資料が会場を埋め尽くした。一つ一つの資料から歌の作られた背景が窺われ、「祖母喜志子との生活を再び味わった思いがした」と榎本

館長がしみじみ語ったのが印象に残った。

企画展開催中の十月七日（土）午後二時から、榎本館長を講師に迎え、文化講座「祖母喜志子を語る」が開催された。この講演には、宮崎県日向市東郷町の若山牧水記念文学館の伊藤一彦館長もお出でになるなど六十七名もの参加があった。

講演は、喜志子の生い立ちに沿いながら、当時の生活を詠んだ作品とその背景の説明を交えつつ、孫の目から見た家庭人としての喜志子、歌人としての喜志子の生涯についての身近にいた者ならではの興味ある話であった。

今回の企画展開催に当たって、館長が改めて様々なことを調べていたら、牧水と喜志子が結婚したときの日付（五月十日）と親友の平賀春郊へ結婚を報告した手紙の日付（五月十二日）が、孫聚一（五月十日）と篁子（五月十二日）の結婚記念日と重なっていることを見つけて、不思議な縁を感じ、うれしく思ったと話され、喜志子の性格は、厳しく、優しく、可笑しく、可愛く、モダンで、好奇心旺盛な人であったとも語られた。

また、昭和三十九年に岡山県哲西町（現新見市）の二本松峠の歌碑除幕のときに、現地に行くことができず、大悟法利雄氏に託した喜志子のメッセージテープが流された。榎本



展示資料を説明する榎本館長

館長は、当人を知っている人が聞くと少し違う声に聞こえるのではないかと懸念されていたが、喜志子の声を初めて聞く者にとっては、展示されている資料と相まって、喜志子を身近に感じる事ができた。

講演終了後、館長による展示の説明もあって、会場は大変な賑わいを見せた。

今回の企画展を通して、若山喜志子の歌人としての側面、妻、母、祖母としての人間像を広く知っていただけたと思う。

「若山喜志子展」に寄せて

沼津市若山牧水記念館館長

榎本 篁子

移り来ていく日か経つる目に慣れし香貫
の山も秋づきにけり

はしけやし香貫の山に生ふる木のその大
方は稚松わかまつばかり

香貫山はききのよろしと見のよしと誇り
て友につげやりしかな

牧水は、大正九年沼津の千本松原に魅せられて家族と共に沼津に移り、先ず香貫山の麓に居を構えました。右は移り住んで間もなくの喜志子の歌で、夫牧水が魅せられた沼津での生活を共に味わっている妻としての姿が目

に浮かびます。
牧水と「うてはびびくいのちのしらべしらべあひて世にありがたき二人なりしを」の心で結婚生活を送った喜志子もまた歌人でした。若い頃からの文学少女の芽は、牧水との生活の中でも埋もれることなく育まれ、牧水没後の四十年は将にその歌の中で生きたわけ

です。
喜志子は、大正九年から昭和十二年までを沼津で過ごしました。牧水と共にあった八年、没後の九年、人生の大きな節目でもあつ

た沼津での生活は、四人の子女にも少なからぬ影響を与えたわけですが、喜志子にとつても大切な沼津でありました。

昭和十二年沼津を去らねばならなかった喜志子は、

老いはてて再び帰る日のために切爐の蓋は固くしておく

の歌を詠み、心を残して上京いたしました。その後、戦争などもあり、喜志子が沼津へ戻ったのは、牧水菩提寺乗蓮寺の若山家墓所でございます。

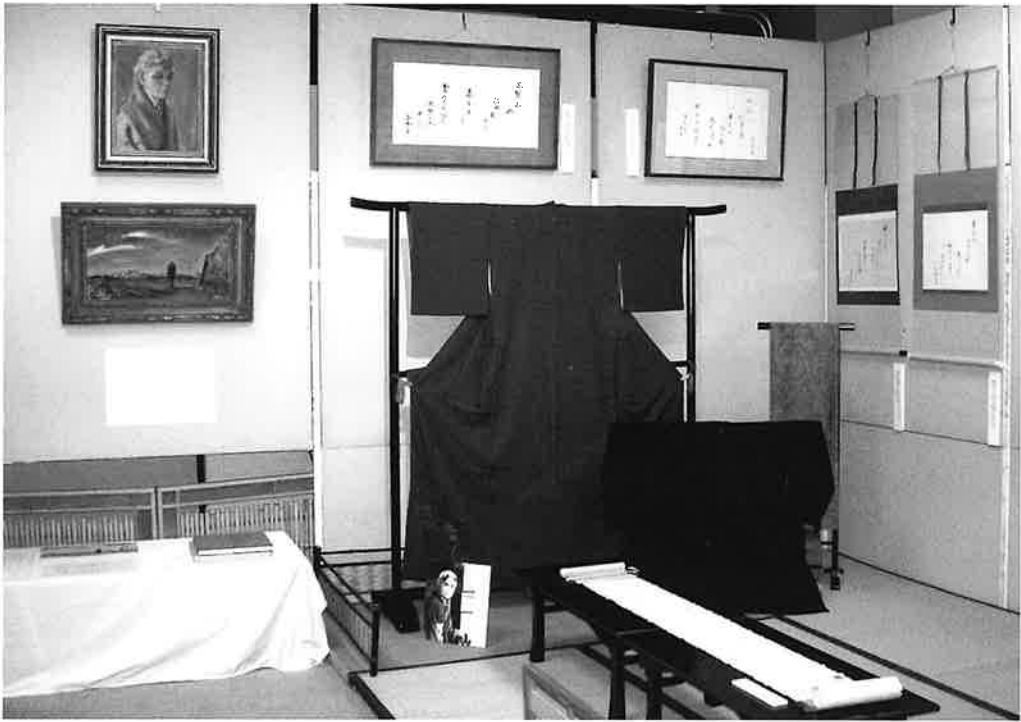
このたび、喜志子に目を向けていただき、「若山喜志子展」が開催されることになりました。苦勞の多い生涯でありましたが、歌人としての、また家庭人としての喜志子の一端をご覧いただけたらありがたく存じます。

牧水・喜志子比翼の歌碑が、喜志子の十三回忌の記念として墓所に建立されています。

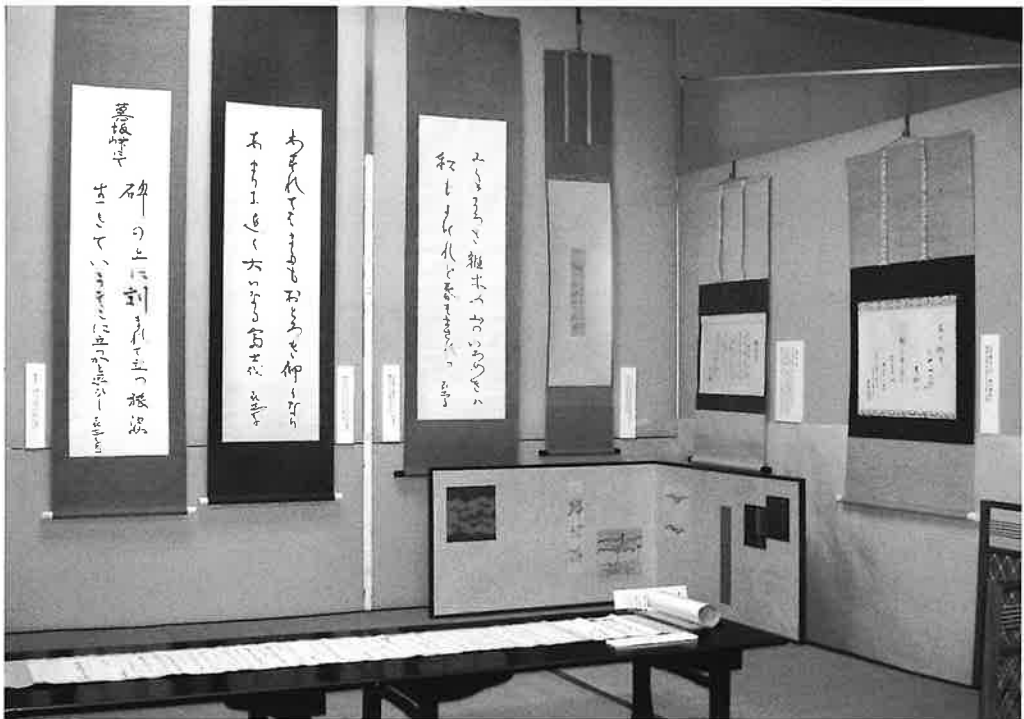
聞きあつたのしくもあるか松風の今は
夢ともうつともきこゆ 牧水

古里の赤石山のましろ雪わがる春のう
みべより見ゆ 喜志子





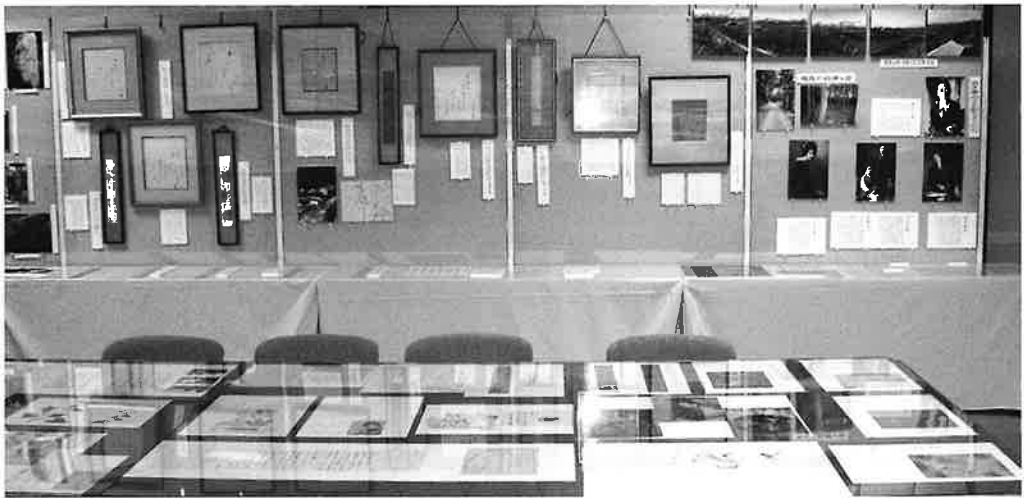
「喜志子の肖像」と「歌人望郷」（油彩画 河越虎之進）、額装、幅物、紋付羽織、着物、帯ほか



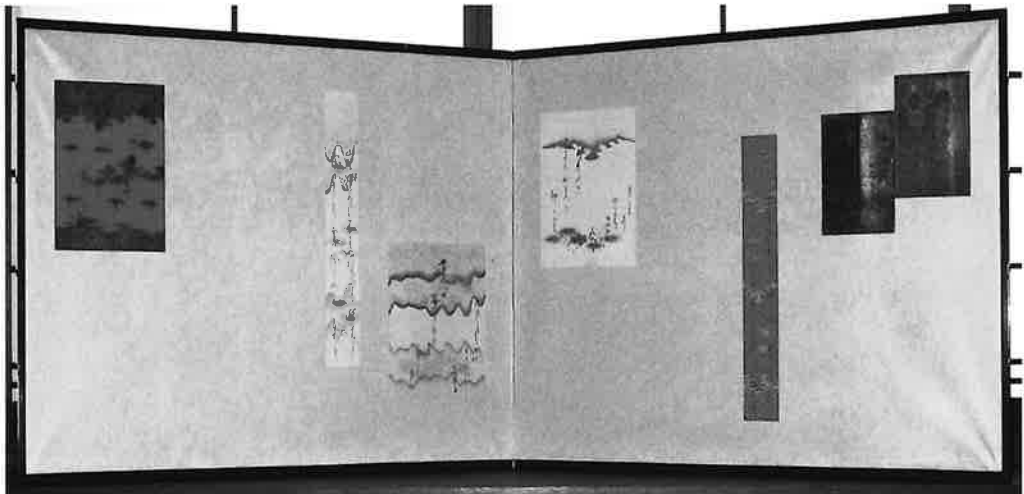
喜志子直筆の半切、孫篁子への結婚祝の風炉先屏風 ほか



昭和 28 年当時の広丘村吉田の風景写真(右上)、若き喜志子を彩る文人たち(右下) ほか



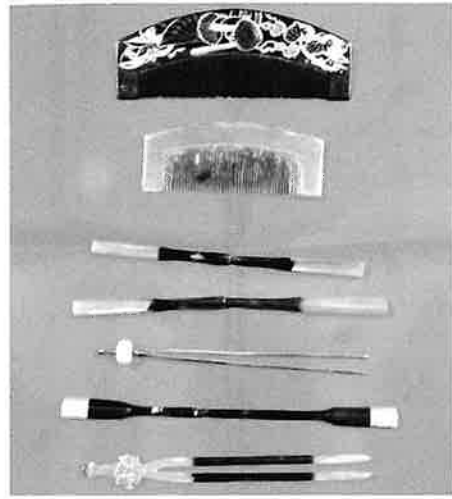
展示場に並べられた喜志子の色紙や短冊



孫篋子に贈られた結婚祝いの風炉先屏風



喜志子愛用の「蛙の硯」



喜志子が用いていた簪と櫛



「歌人望郷」(油彩画 河越虎之進)

「歌人望郷」と我が立ち姿わが知らぬ
うしろ姿が描かれてあり

生まれながらの寂しさは消すによし
もないうしろ姿に描き出されて

ふるさとの山にむかひて孤り佇つ
うしろ姿のむごき画面や

雲に残り没日は遠しいつまでを
佇ちつくすやと問ひたき画面

頂点に立つ者は常寂しよと
言はれし人にうしろ姿描かれつ

『眺望』

第53回沼津牧水祭 短歌大会

十月一日(日)
午前十時三十分
千本プラザ
音楽ホール「松籟」



講演する福島泰樹先生

沼津牧水祭・短歌大会は、短歌誌『月光』の創刊者、「短歌絶叫コンサート」の創出者福島泰樹先生をお招きして、十月一日(日)沼津千本プラザのホールで開催された。

午前の「山河慟哭の歌」と題した講演では、まず、何をどう思うかが大切で、対象に対する深い思いが歌であり、そこには自然にドラマが、人生の真実が、生命の輝きが生まれるという先生の熱のこもった言葉に引き込まれ

る。さらに例歌を挙げながら言葉のニュアンス・調べ・音の持つ力・表意文字である漢字を適切に使うことの効果・助詞の使い方・比喩の大切さにも言及された。

午後は、投稿歌一八〇首の中から約九〇首について例歌を挙げながら懇切に、また、厳しく長所・短所について批評された。福島先生は、「全体的にみてよい歌が多く、生活がよく詠まれていた」との総評をされた。「短歌は日本独自のものです、原点は上代の歌謡にある」と、先生は締めくくりに短歌絶叫を交えられ、迫力と躍動感のある楽しい大会となった。

以下、福島先生の選ばれた作品選者賞と互選賞を紹介する。

(選者賞)

(星谷亜紀)

牧水賞一席 御殿場市 長田多津恵

老いて病めばさらに愛しき伴侶にて痴呆の姉に箸を持たしむ

選評 痴呆の姉の具象表現によって、愛の絆の深さがわかる。

牧水賞二席 沼津市 林 和

パレットに赤き絵の具を取り出せばあの夏のキャンナ、令状の色

選評 赤の絵の具から夏のキャンナ、戦争中の召集令状への色の連想がよい。

牧水賞三席 高松市 涼ノ海音

わがちえぬかなしみ思ふただひとり目玉とりつつ鯛喰ふとき

選評 鯛と言う魚名により、人生の哀しみと孤独感が深まっている。

(互選賞)

市長賞 伊東市 石田直江

トラックに採りしみかんと夕日乗せヘアピン・カーブゆるゆるくだる

市議会議長賞 浜松市 久米玉枝

我が腕にかすかな温き感触を残して仔猫貰はれゆけり

教育長賞 神戸市 前田あつ子

納屋隅にいま脱ぎ捨てし地下足袋の小鉤ひかれり生き物のごと

商工会議所会頭賞 広島県大竹市 赤瀬勝昭

空襲も飢えたることも無き孫ら拘りており興味期限を

観光協会会長賞 沼津市 林 和

パレットに赤き絵の具を取り出せばあの夏のキャンナ、令状の色

沼津朝日新聞社賞 御殿場市 長田多津恵

老いて病めばさらに愛しき伴侶にて痴呆の姉に箸を持たしむ

マルサン書店賞 田方郡函南町 塩谷千鶴子

夕ぐれをかえりくる父の馬の背の刈苣にゆれて山百合におう

第53回 沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月十五日(日) 午前十一時

二年ぶりに好天に恵まれた碑前祭となった。斎藤衛市長、工藤達朗教育長、服部博義市議会副議長をはじめとする市議会議員、牧水の生誕地宮崎県東郷町が合併した日向市から黒木久典生活環境部長、東郷町若山牧水顕彰会都甲欣一会長、那須文美事務局長、須美哲也坪谷中学校長、東京牧水会の和田昱二会長、田原大三事務局長等の参加を得て、にぎやかに式典が行われた。

琴名流沼津支部の三人のメンバーが奏でる大正琴の音が流れ、定刻午前十一時に開会。林理事長の挨拶、斎藤市長と工藤教育長の祝辞、榎本篁子当館館長の献花、献酒と挨拶に続き、花柳寿宗氏による牧水の短歌、長詩「枯野の旅」の日本舞踊が芝生の上で披露された。岳心流沼津愛吟国風会の牧水短歌の詩吟朗詠の後に、第十七回「中学生短歌コンクール」の特選十首の発表と表彰があり、参加者から大きな拍手が起きた。

締めくくりは、「牧水のうた」を歌う会の合唱で、牧水短歌四首が美しいハーモニーと

なつて、秋空へ突き抜けて行った。



芝生の上で舞う花柳寿宗氏

芝酒盛に移る前に、東京の加藤裕氏の実父、進氏が六十九年に牧水から贈られた扇子が、加藤氏から林理事長に手渡された。扇子に書かれた歌は「わが友を見送るけふのわかれの酒いざいざ酌めな別れゆかぬとに」。

進氏は新聞記者として沼津滞在中に牧水と親交を深め、進氏の転任の送別会で牧水が即興で詠んだ歌をしたため贈った扇と記念写真が寄贈されたもので、貴重な資料である。

正午を少し過ぎて芝酒盛の開始となった。原酒牧水の菰樽の鏡開きが斎藤市長、服部副議長、日向市の都甲会長、東京の和田会長、

榎本館長の五人により行われ、服部副議長の音頭で乾杯となり、芝酒盛が始まった。

結成三十周年を迎えた裾野五竜太鼓保存会による太鼓が、女頭を中心とする六人揃いで演じられ、「滝」「ビート」「乱れ打ち」「寄せ打ち」の四演目を見事な撥さばきで楽しませてくれた。宴の後半は、「ようそろ」(はせみきた代表)が若さと野性味溢れる「天海共鳴」と「沼津牧水太鼓」を勢いよく演じ、来場者に感動を与えてくれた。名物のおでんが振舞われ、木の香のふくよかな酒とおでんで満足感に浸った。

紅白幕に囲まれた茶席も設けられ、前年から協力していただいている裏千家上村宗菊代表の宗菊会が振舞ってくれる一服のお茶を味わい、行く秋を楽しんだ一日であった。



牧水ゆかりの扇の贈呈式

雛の歌会



第十九回「雛の歌会」は、平成十九年三月三日（土）雛まつり当日の開催であった。歌集『あかるたへ』で第十回若山牧水賞を受賞された水原紫苑先生を講師としてお迎えし、若山牧水記念館のラウンジに満席の八十四名が参加された。投稿歌百二十五首。お雛様の柄の和服をしつとりと召された先生を三方から囲むようにしての歌会は、雛の日にふさわしい和やかさに満たされた。

先生のなめらかなで簡潔な批評は語彙の豊かさゆえかストリートに心に届き、終了後に質問の時間も設けていただけた。動詞は少なめ

に、名詞が多い方が落ちつく。また、講師として作品の添削は避けることを信条としているという、先生の言葉は印象的であった。

講師選十首を挙げる。

マンシヨンの裏となりたる棄て畑に頭も

ちあげ黄水仙咲く 塩谷千鶴子

黄の色は命の色、いのちのしたたかさやを良く詠い得た。黄水仙は効果的である。

干し竿にきらりと並ぶ水滴は朝日と風に

命競ひぬ 鬼丸早苗

水滴を擬人化、可憐さに寄せる思いがいい。

通学路 外れて村道に入りし児ら待ってま

したと「ケンケン」しゆく 向笠律子

村道に入ってようやく緊張感が解けた子供らの様子が的確に描写された。

たおやかにおわせどすでに古妻の雛のか

んばせ紅あせにけり 原田芳江

古語を用いて古妻われと雛との共生をさら々と詠い得て妙、結句の紅あせにけりに万感がかもっている。

虫干しの母の衣に光りある安全ピンは今

だ錆びざる 佐藤なほ子

着物に刺されたままに流れた時空への思い。いまだに光っている安全ピンの具体がいい。

白骨と化する月消す無機質の旭の中にひ

と日始まる 大島千鶴子

「化する」は「化したる」であろう。一種虚無的でありながら詩的情緒がある。旭は意識のか？

どちらからともなく夫と二人覚め病気の猫の寝息たしかむ 近藤ゆみ子

素材が自由な存在としての猫だから成立した一首といえよう。

マリア・カラスのコロラトゥーラの楽譜か

も紅のつぼみのしだれ桜は 舟本恵美

紅のつぼみのしだれ桜からの連想。一首を通して色・音・形のひびき合いがいい。

老いたれど吾に短歌あり野の花も空とぶ

鳥もみな歌友なり 土屋みや子

蜜蜂が一世をかけて得る蜜の嵩知りしときかなしくなりぬ 杉山久枝

のお二人は当日欠席された。

他の作品も少し挙げてみよう。

天霧らふ天竜川を越え来れば初雪被く美

しきうそ 高木絢子

結句の「美しきうそ」の実体はわかり難いが、イメージとしてこの作品には華がある。

身にまとふさびしきものをこぼすがにひ

とつばたごの花散りやまず 杉山春代

その散りざまを見たことはないが、心理の投影ともその景が良く合っている作品である。

(青木朝子)

文化講座

入学試験アラカルト - 沼津中等学校創設期 -

日時 平成18年9月16日(土) 午後1時30分～3時30分

講師 四方一滌氏



祖母 喜志子を語る

日時 平成18年10月7日(土) 午後2時～3時40分

講師 榎本 篁子館長



初心者のための短歌講座 牧水記念館短歌会

日時 平成18年4月～平成19年3月
毎月第2土曜日 午前・午後

講師 須永 秀生氏



書道講座

日時 平成18年4月～平成19年3月
毎月第3火曜日 午後

講師 成田 真洞氏



サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

古楽コンサートシリーズ 19

『浜松市楽器博物館館長の話 &
リコーダー、ソプラノ、チェンバロの夕べ』

日 時：平成 18 年 6 月 10 日(土) 午後 6 時 45 分

出 演：嶋 和彦(お話、リコーダー)

広瀬奈緒(ソプラノ)

杉山佳代(チェンバロ)

来場者：100 人



久元祐子「対談コンサート」

『生誕 250 年 モーツァルトの魅力』

日 時：平成 18 年 11 月 1 日(水) 午後 6 時 30 分

出 演：久元祐子(ピアノ)

ゲスト：池内 紀(ドイツ文学者)

来場者：59 人

『シューベルトとフォーレ歌曲の夕べ』

日 時：平成 18 年 11 月 11 日(土) 午後 6 時 30 分

出 演：濱野さえ子(ソプラノ)

伊藤典子(ピアノ)

鈴木千香子(メゾソプラノ)

沼野真弓(ピアノ)

来場者：84 人



弦と管 魅惑のジョイント『二胡&フルート』

日 時：平成 19 年 3 月 18 日(日) 午後 6 時 30 分

出 演：王 霄峰(二胡)

川島祐子(フルート)

来場者：82 人

平成18年度事業報告

- 総会（第20回総会） 平成18年5月12日（金）午後6時～7時20分
 理事会 第1回（通算105回）平成18年4月19日（水）午後6時～7時30分
 第2回（通算106回）平成18年5月12日（金）午後7時～7時10分
 第3回（通算107回）平成18年8月30日（水）午後6時～6時45分
 第4回（通算108回）平成18年12月15日（金）午後6時～6時50分
 第5回（通算109回）平成19年3月8日（木）午後6時～6時50分

- 会報発行 第19号発行 平成18年5月15日
 館報発行 第37号発行 平成18年9月15日
 第38号発行 平成19年3月15日

1 調査研究事業

- (1) 第7回「百草園牧水碑前祭」（東京牧水会主催）
 日 時：平成18年8月27日（日）正午
 会 場：東京都日野市百草園 牧水歌碑前
 参加者：林茂樹、金子安夫、小出和夫、
 原悦子、三宅芳則、野毛孝容、
 赤澤照雄
 (2) 第56回 牧水祭（宮崎県日向市主催）
 日 時：平成18年9月17日（金）午前10時
 会 場：日向市東郷町坪谷 若山牧水生家裏
 牧水歌碑前及び牧水公園ふるさとの家
 祝電打電

(6) 書道講座

- 日 時：平成18年4月～平成19年3月
 毎月第3火曜日 午後1時～3時
 会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
 講 師：成田真洞氏
 参加者：延べ188人

(7) 第17回「中学生短歌コンクール」募集・表彰

- 募集期間：平成18年4月7日（金）～9月10日（日）
 応募短歌：1,739 首（15校 1,739人）
 入選短歌：53首（53人）
 選 者：青木朝子、川口和子、須永秀生、杉山芳春、
 曾根耕一、星谷亜紀
 表 彰：平成18年10月15日（日）
 沼津牧水祭碑前祭にて

2 第53回沼津牧水祭の運営

- (1) 短歌大会
 日 時：平成18年10月1日（日）午前10時30分～午後3時
 会 場：沼津市千本プラザ 音楽ホール「松籟」
 講 師：福島泰樹氏（「月光の会」主宰第4回若山牧水
 賞受賞者）
 応募短歌：180首
 参加者：95人
 (2) 碑前祭・芝酒盛
 日 時：平成18年10月15日（日）午前11時～午後2時
 会 場：千本浜公園 牧水歌碑前
 参加者：約400人

4 特別企画展「若山喜志子展」

- 期 日：平成18年9月20日（水）～10月15日（日）
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 入 場 者：853人

5 企画展示

- (1) 「中学生短歌コンクール」入選短歌作品（短冊）展示
 期 日：平成18年10月17日（火）～10月29日（日）
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 入 場 者：418人
 (2) 平成18年度「書道講座」受講者作品展示
 期 日：平成19年3月28日（水）～4月8日（日）
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 入 場 者：597人

3 文学講演会及び文学講座等の開催

- (1) 文化講座
 「入学試験アラカルト -沼津中等学校創設期-」
 日 時：平成18年9月16日（土）午後1時30分～3時30分
 会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
 講 師：四方一弥氏
 参加者：38人
 (2) 文化講座
 「祖母 喜志子を語る」
 日 時：平成18年10月7日（土）午後2時～3時40分
 会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
 講 師：榎本崑子館長
 参加者：67人
 (3) 第19回「雛の歌会」
 日 時：平成19年3月3日（土）午後1時30分～3時45分
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 講 師：水原紫苑氏（第10回若山牧水賞受賞者）
 応募短歌：125首
 参加者：84人

(4) 初心者のための短歌講座

- 日 時：平成18年4月～平成19年3月
 毎月第2土曜日 午前10時～12時
 会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
 講 師：須永秀生氏
 参加者：延べ221人

(5) 牧水記念館短歌会

- 日 時：平成18年4月～平成19年3月
 毎月第2土曜日 午後1時30分～3時30分
 会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
 講 師：須永秀生氏
 参加者：延べ140人

6 音楽イベント

- 第1回 古楽コンサートシリーズ19
 【浜松市楽器博物館館長の話
 & リコーダー、ソプラノ、チェンバロの夕べ】
 日 時：平成18年6月10日（土）午後6時45分
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 出 演：嶋和彦（お話、リコーダー）
 広瀬奈緒（ソプラノ）杉山佳代（チェンバロ）
 来 場 者：100人
 第2回 久元祐子「対談コンサート」
 【生誕250年 モーツァルトの魅力】
 日 時：平成18年11月1日（水）午後6時30分
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 出 演：久元祐子（ピアノ）ゲスト 池内紀
 来 場 者：59人
 第3回 「シューベルトとフォーレ 歌曲の夕べ」
 日 時：平成18年11月11日（土）午後6時30分
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 出 演：鈴木千香子（メゾソプラノ）
 沼野真弓（ピアノ）濱野さえ子（ソプラノ）
 伊藤典子（ピアノ）
 来 場 者：84人
 第4回 弦と管 魅惑のジョイント【二胡&フルート】
 日 時：平成19年3月18日（日）午後6時30分
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 出 演：王霄峰（二胡）川島祐子（フルート）
 来 場 者：82人

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

- 第一条 この法人は、社団法人沼津牧水会という。
- 第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。
- 第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。
- 第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
 - (2) 沼津牧水祭（短歌大会および碑前祭）の運営
 - (3) 文学講演会および文学講座の開催
 - (4) 文学に関する各種出版物の刊行
 - (5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
 - (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業
- 第五条 この法人の会員は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
 - (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人
 - (3) 名誉会員 この法人に特に功勞のあつた者で、総会の議決をもって推薦された者
- 第六条 会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。
- 第七条 この法人の入会金は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
 - (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- 2 この法人の会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 年額 五、〇〇〇円
 - (2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

（理事長）林 茂樹 （副理事長）杉山 光男 須永 英男
 （理事）浅井 治 保坂 輝夫 田中 和男 川口 和子 金子 安夫
 四方 一勝 八十濱俊一 杉山 芳春 長澤 靖夫 青木 朝子
 星谷 亜紀
 （監事）杉山 重義 鈴木 弘行
 （事務局長）金子 安夫 （事務局）大島 葉子 伊藤早智子 羽根田治子

編集後記

「沼津牧水祭・短歌大会」において、講演の締めくくりに迫力のある短歌絶叫をお聴かせくださった福島泰樹先生から玉稿を頂戴しました。

牧水の妻喜志子を取り上げた「若山喜志子展」は、榎本篁子館長、若山家、喜志子の実家である塩尻市の太田家をはじめ各方面から多大なご協力を賜り、充実した展示となりました。展示風景を紙面で振り返りましたので、ご覧ください。

「雛まつり」の当日に開催された「雛の歌会」は、講師の水原紫苑先生が「雛の絵柄」の素敵な大島紬のお召物で来館され、その語り口と相まって参加者はすっかり魅了されました。記念館ラウンジでの「雛の歌会」開催は初めてでしたので、一般の来館者に迷惑にならないようにと気を配りましたが、苦情もなく、大変好評でした。

モーツァルト生誕二五〇年にちなんだ久元祐子「対談コンサート」には、牧水ファンで『新編みなかみ紀行』（岩波文庫）の編者であるドイツ文学者池内紀先生をゲストにお招きしました。モーツァルトにまつわるエピソードを聞かせていただき、久元さんの素晴らしいピアノ演奏を聴くことができました。「記念館コンサート」は四回開催しましたが、それぞれ充実した演奏会で、牧水記念館に欠かせない催しとなっています。

本年は、牧水没後八十年目で、沼津市若山牧水記念館開館二十周年に当たります。記念事業として、九月二十一日（金）に「日本ほろよい学会」沼津大会を開催します。ぜひ、ご参加ください。